

氏名	山口 雄治
学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第4191号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	縄文時代における居住形態の変動と多様性に関する研究
学位論文審査委員	主査・准教授 松本 直子 教授 新納 泉 准教授 松木 武彦 准教授 今津 勝紀 国立民族学博物館准教授 野林 厚志

学位論文内容の要旨

当論文は、中国地方の縄文時代後半期から弥生時代前期までを対象とし、居住遺跡の動態についての分析を主幹としつつ、生業と関わる石器組成や、墓や土偶などの象徴的遺構・遺物の分析も合わせて多角的・総合的な視点から考察し、居住形態の変遷を明らかにしたものである。

縄文時代の居住形態に関する研究については、縄文社会を定住的とみる見解と移動性の高い社会とみる見解の両者が併存していること、単線的・発展段階論的な視点から「定住はいつからか」という問題設定での議論が多いことなどが指摘され、時期的にも地域的にも多様である実態を踏まえた議論が必要であることが述べられる。そのうえで、「定住」とは年間を通じて同じ場所に居住することを指すものに限定し、必ずしも定住でなくても、一定の居住地や地域に継続的に居住する度合いを「定着性」と定義し、後者に注目した分析を行うことで、居住形態の時間的・地域的多様性を考察するという視点を示す。

縄文時代中期から弥生時代前期を対象として、遺跡の分布や継続性、遺跡の内容について分析した結果、本論におけるⅠ期には移動性が高い状態から、Ⅱ期以降に地域的定着性が、Ⅲ期には居住地における定着性が高まること、しかしⅣ期からⅤ期にかけては再び移動性が高まることを指摘している。貯蔵穴などの遺構の分析からは、Ⅵ期以降には通年定住が行われたと推定する。また、弥生時代前期にいたっても地域的定着性は低く、比較的移動性が高いことが示された。

さらに、石器組成とその空間的配置の分析から、生業と集団構成について論じ、Ⅵ期以降には打製石斧が出現することや、石鏃を大量に保有する遺跡がみられることから、植物質食料利用の増大と、集団間の協業の可能性が指摘される。墓や土偶などの、象徴性と関わる遺構・遺物についても遺跡動態と合わせた分析を行い、遺跡動態や人口動態と連動した変化がみられることが論じられる。

居住形態と物質文化の変化について、隣接地域の様相との比較も踏まえた総合的検討の結果、中国地方における居住形態の変動パターンは、関西地方や九州地方とも内容やタイミングが異なっていることが明らかとなった。また、物質文化に関わる情報伝達のあり方や文化変容の時期と、定着性の高低の間の複雑な関係性の一端についても明らかとなった。

学位論文審査結果の要旨

審査会では、学位論文の内容について 50 分程度の口頭発表の後で、審査委員による質疑応答および講評を行った。総合的には、対象とする範囲のデータを網羅的に収集して分析を行い、中国地方と

いう広い範囲で長期にわたる居住形態の変化を明らかにしたことに對して、高い評価が与えられた。

審議の過程では、各審査委員から、分析の方法や概念定義、別の解釈の可能性等について質問や指摘がなされた。遺跡の数の変動と人口との関係については、本論文で示されたものとは異なる解釈も可能ではないかという指摘があり、遺跡群認定の基準を明確にすること、地形などを考慮した地域レベルの分析を行うことなどで、より確かな分析に発展させることが望ましいとされた。定住と定着という概念や、集団狩猟を推定する際の理論的基礎などについては、民族誌で確認できる狩猟採集社会の居住形態との対応について問われ、考古資料から社会集団や社会的行為を復元する際の方法論的な基盤も、さらに充実させる余地があることが指摘された。また、従来の発展段階論的な定住化をめぐる議論に対して批判的な立場から書かれた論文であるが、結果としては必ずしもそれを否定する内容になっていないのではないかとする意見もあった。

以上のような指摘やコメントはあったが、その多くは今後のさらなる研究の深化を促すものであった。データに基づいた堅実な研究から、関西地方と九州地方に比べて状況がよく分かっていなかった中国地方の縄文社会の実態について明らかにした本研究の学術的意義は大きく、学位論文として十分な内容であるという点については審査委員全員の意見が一致し、合格と判定した。